成人期以降の自己愛的脆弱性の発達的変化
――高齢者と大学生の比較に基づく考察――
Developmental changes in narcissistic vulnerability during and after adulthood

目久田純一[1)]　百瀬ちどり[2)]　越中康治[3)]
MEKUTA Jun-ichi　MOMOSE Chidori　ETCHU Koji

Developmental changes in narcissistic vulnerability were investigated, by comparing scores of the Short Version of Narcissistic Vulnerability Scale (NVS) between older adults (80 men and 133 women; mean age, 69.23 years) and university students (62 men and 93 women; mean age, 21.11 years). Welch's *t* tests indicated that scores of older adults were significantly lower than scores of university students on three subscales of NVS with middle to high Cohen's *d*s: inhibition of self-exhibition, insufficient self-soothing, and hypersensitivity to approval/ admiration. We proposed a tendency for decreased narcissistic vulnerability during and after adulthood on the basis of findings from the treatment of narcissistic personality disorder. The sequence of separations of self- and other-representations could result in the reduced use of the narcissistic defenses by adequately, in the secure relationship with significant other, addressing the sense of ego incongruity that emerges from changes in social roles and physical attractions.

Key words: Narcissistic vulnerability; older adults; the sense of ego incongruity

問題と目的

自己愛（narcissism）とは自己に対するリビドーの供給であり（Lieberman, 2004 神谷・市田 監訳 2007），社会生活においては自他の心の中に自分の気に入るような鏡像をつくり上げ，それを確認して安心したり満足したりする気持ちとして表れる（小此木，1981）。自己愛は，誇大で自己顕示的な側面（誇大性―自己顕示性）と，他者からの評価に対して過敏で自己を支えることの困難な側面（敏感性―脆弱性；以下，自己愛的脆弱性と表記する）から捉えられる（e.g., Pincus, Cain, & Wright, 2014; Wink, 1991）。これらの 2 側面は，互いに独立した特性ではなく，自己愛スペクトラムの両極に位置づけられ（Gabbard, 1997 佐野 監訳 2003），“誇大的自己愛者も過敏的自己愛者もその内部には共に誇大感を有しており，両タイプは対人関係における特徴の異なりから弁別される”（原田，2009，pp. 24-25）。

いずれの側面が強く表れるにせよ，自己愛的な人物になるか否かについては，発達初期の親子関係のあり方が影響している。生後 10 か月から 15 か月の分離―個体化の練習期に，子どもが分離―個体化欲求を無視されて母

著者所属：[1] 梅花女子大学心理こども学部こども学科
[2] 松本短期大学看護学科
[3] 宮城教育大学教育学部学校教育講座

親の理想化投影に共鳴するように強要されることや，自己愛性パーソナリティ障害傾向の強い父親に同一化することによって，その子どもの自我発達は停止する（Masterson, 1981 富山・尾崎 訳 1990）。そうした子ども達は，自我発達の停止により幼児的な誇大感を保持し続け，その後の社会生活において誇大的かつ自己顕示的になったり，あるいは自他にとって理想的な自分であり続けるべく，他者からの評価に対して敏感になったりする。

幼児期の親子関係に根源をもつ自己愛的な特徴は，青年期に至って顕著になる。中山（2007）は，小学6年生から大学生までの 1447 名を対象に調査を行い，自己愛の誇大性—自己顕示性の側面と自己愛的脆弱性の側面の両方ともが中学生から高校生にかけて増加し，高校 2，3 年生頃にピークを迎え，大学生において減少するという発達的傾向を報告している。このような青年期における自己愛の高まりは，アイデンティティの再構築という発達課題に直面し，“児童期までに形成された精神構造が崩壊し，乳幼児期の自己愛状態へ退行した結果である”（小塩，2004, p. 189）。青年期における自己愛の高まりについて，誇大性—自己顕示性の側面は自尊感情を高めるなど適応に貢献しているが，自己愛的脆弱性の側面は対人恐怖を高めるなど不適応を引き起こす一因になりうる（e.g., 上地・宮下，2009；川崎・小玉，2007；小塩，1998，2001；清水・川邊・海塚，2008）。しかし，いずれの側面が強く表れるにせよ，自己の再構築や新しい社会的役割の獲得を試みる青年期においては，自己愛的になることは正常な状態であると考えられている（Horton, 2011）。

それでは，成人期以降の発達段階では，自己愛はどのように変化していくのだろうか。全般的に自己愛は成人期以降に加齢にともない低下していくと考えられる。Foster, Campbell, & Twenge（2003）は，8歳から83歳までの3445名に対して自己愛人格目録（NPI; Raskin & Terry, 1988）を実施し，NPI得点と年齢の関連性について検討した。その結果，NPIの総得点およびすべての下位尺度得点（優越感・有能感，自己主張性，そして注目・賞賛欲求）に対して年齢は有意な負の標準化係数を示した。また，原田（2012）は，大学生・大学院生と成人（26歳から35歳）との間で，自己愛の誇大性と過敏性の両方を測定しうる自己愛人格尺度短縮版（NPS短縮版；谷，2006）の得点を比較し，すべての下位尺度において成人の平均得点が大学生・大学院生の平均得点よりも有意に低いことを示している。成人期以降では加齢にともない，自分自身の欠点や限界が受容され，他者に対して良く見せようとする欲求が低下し，より強固な自己価値が保持されるという知見（Robins & Trzesniewski, 2005）も踏まえると，パーソナリティが成熟・円熟化する中で，自己愛は低下していくと考えられる。

しかしながら，Foster et al.（2003）の結果については，自己愛の誇大性—自己顕示性の側面に対しては説得力のある証拠を提供しているといえるが，自己愛的脆弱性の側面に対しては検討の余地が残されている。自己愛的脆弱性は，厳密には“自己の価値や存在意義と関連した不安や傷つきを処理し，肯定的自己評価や心理的安定を維持する能力の脆弱性”（上地・宮下，2006，p. 83）と定義され，実証的には4つの下位尺度（自己顕示抑制，承認・賞賛過敏性，自己緩和不全，そして潜在的特権意識）から構成される（上地・宮下，2009）。NPIの下位尺度の注目・賞賛欲求は自己愛的脆弱性を反映していると考えられる。しかし，その項目内容（小塩，2004）を概観すると，自己愛的脆弱性尺度短縮版（上地・宮下，2009）の承認・賞賛過敏性および自己緩和不全の項目内容と類似した項目が包含されているものの，自己顕示抑制や潜在的特権意識の項目内容と類似したものはない。また，NPS短縮版を用いた原田（2012）においても，自己愛的脆弱性尺度短縮版（上地・宮下，2009）の承認・賞賛過敏性とは類似した項目群（自己愛性抑うつ）が存在するものの，自己顕示抑制，自己緩和不全，そして潜在的特権意識と類似した項目群は含まれていない。したがって，Foster et al.（2003）および原田（2012）の結

果から，自己愛的脆弱性の自己緩和不全と承認・賞賛過敏性については成人期以降の発達にともなう低下が予想されるものの，自己顕示抑制と潜在的特権意識については不明である。

自己愛的脆弱性については，誇大性－自己顕示性の側面に比べて研究の数そのものが少ないものの，恥や自己抑制が認められやすい日本社会において，人々の心の動きを説明する有益な概念として精力的な研究が求められている（川崎，2011）。また，加齢にともなう自分自身の身体的変化を認識することが自己愛の傷つきを引き起こすという見解（小此木，1981）も考慮すると，自己愛的脆弱性は青年期のみならず成人期以降の発達段階においても人々の適応を左右しうる重要な概念であると推測される。しかしながら，本邦では成人期以降の人々の自己愛的脆弱性について検討した研究はまだ少なく，成人期以降の発達段階における自己愛的脆弱性の様相が明らかにされているとはいえない現状にある。

そこで，本研究は成人期以降の自己愛的脆弱性の発達的変化について検討すべく，高齢者と大学生の間で自己愛的脆弱性を比較する。すなわち，NPI や NPS よりも自己愛的脆弱性をより多面的に把握しうる尺度（上地・宮下，2009）を使用し，高齢者と大学生の間でその下位尺度得点を比較する。Foster et al.（2003）と原田（2012）の結果に基づくと，自己緩和不全と承認・賞賛過敏性の 2 下位尺度においては高齢者のほうが大学生よりも低い得点を示すと推測されるが，自己顕示抑制と潜在的特権意識の 2 下位尺度における結果は定かではなく，探索的に検討する。そして，高齢者と大学生の比較結果および自己愛の障害に対する治療プロセスを手がかりにして，成人期以降に自己愛的脆弱性を低下させる原因について考察する。

なお，これらの検討に先駆けて，自己愛的脆弱性尺度の妥当性についても検討する。当該尺度は大学生から収集されたデータを基にして作成され，一定の信頼性と妥当性が確認されているものの，必ずしも高齢期の自己愛的脆弱性を捉えうるとは限らず，高齢期における妥当性の検証が必要である。

方　　法

参加者

高齢者　2013 年 8 月に A 県で開催されたシニア大学に参加した 223 名が調査に参加した。データの分析に先駆けて，回答に 3 項目以上の不備のあった 9 名と年齢が 60 歳未満だった 1 名を分析から除外した。その結果，最終的な分析対象者は 60 歳から 83 歳までの 213 名であり（男性 80 名，女性 133 名），平均年齢は 69.23 歳（*SD* = 4.54）だった。なお，最終的な分析対象に含まれたデータにおいて無回答だった箇所には，当該項目の平均得点を代替得点として割り当てた。

大学生　2013 年 12 月から 2014 年 1 月にかけて，B 県の四年制大学に在籍する 155 名が調査に参加し（男性 62 名，女性 93 名；平均年齢 21.11 歳，*SD* = 0.72；年齢の無回答 2 名），全員から有効回答が得られた。

調査内容と手続き

上地・宮下（2009）によって作成された自己愛的脆弱性尺度短縮版（a short version of narcissistic vulnerability scale）を用いた。当該尺度は全 20 項目の 4 下位尺度から構成されている。すなわち，自己顕示抑制，承認・賞賛過敏性，自己緩和不全，そして潜在的特権意識であり，各下位尺度は 5 項目の質問項目から構成されている。

調査では，乱数にしたがって呈示順序が無作為化された 20 項目の各文章について，参加者が日常生活の中でそれらを体験する度合いを 5 段階で自己評定した（5：よくある，4：ときどきある，3：たまにある，2：めったにない，1：まったくない）。得点化に際しては，下位尺度ごとに該当する項目の得点を加算し，その得点を項目数で除算した。したがって，各下位尺度得点のとりうる値の範囲は 1 点から 5 点までだった。

高齢者の参加者には，シニア大学の開始直前に配布される資料とあわせて，本調査内容を含む調査冊子を配布した。回答を終えた参加者は，シニア大学の会場入り口に設置した調査冊子回収箱に回答済みの調査冊子を提出した。大学生の参加者に対しては，講義時間の一部を利用して一斉に調査を実施した。大学生において調査に要した時間はおよそ 5 分だった。

結　　果

高齢者における自己愛的脆弱性の概念構造

高齢者による自己愛的脆弱性尺度短縮版の全 20 項目の回答に対して探索的因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行ったところ，5 つの因子が抽出された。次いで，いずれの因子に対しても負荷量が.40 以下である項

Table 1　Factor analysis for a short version of narcissistic vulnerability scale (principle factor analysis and promax rotation)

Items	Factor loadings				h^2	*M*	*SD*
	Factor 1	Factor 2	Factor 3	Factor 4			
Factor 1: Inhibition of self-exhibition (α = .80)							
人と話した後に「あんなに自分を出すのではなかった」と後悔することがある。	**.76**	-.15	.06	.11	.62	2.70	0.80
「自分のことを話しすぎた」と思って，自己嫌悪におちいることがある。	**.71**	.20	-.23	.02	.52	2.45	0.78
だれかと話しているときには，自分の話題で時間を取りすぎてはいけないと思って気にしている。	**.63**	-.03	.05	-.15	.33	2.63	0.85
他の人に自分のことを自慢するような話をしたあとで，後味の悪い感じが残ることがある。	**.62**	-.11	.03	.19	.49	2.39	0.78
人前で自分のことを話したあとに，話した内容について後悔することがある。	**.59**	.13	.15	-.11	.50	2.92	1.00
Factor 2: Insufficiency of self-soothing (α = .76)							
精神的に不安定になっているときには，だれかと話をしないと落ち着くことができない。	-.06	**.81**	-.01	.02	.61	2.31	0.81
不安を感じているときには，だれかから大丈夫だと言ってもらわないと安心できない。	-.01	**.75**	-.02	.05	.58	2.22	0.90
悩みや心配事があるときには，自分の中にとどめておけなくて，すぐだれかに話したくなる。	.09	**.60**	.10	-.13	.41	2.68	0.93
Factor 3: Covert sense of entitlement (α = .79)							
まわりの人に対して「もっと私の気持ちを考えてほしい」と思うことがある。	-.16	.12	**.74**	.03	.54	2.32	0.82
まわりの人の態度を見ていて，こちらへの配慮が足りないと思うことがある。	.09	-.05	**.72**	.03	.58	2.57	0.82
まわりの人に対して「もっと私の発言を尊重してほしい」と思うことがある。	.10	-.04	**.72**	.04	.61	2.25	0.78
Factor 4: Hypersensitivity to approval/ admiration (α = .77)							
自分の発言や行動が他の人から良く評価されていないと，そのことが気になってしかたがない。	.02	-.14	.05	**.79**	.60	2.10	0.84
自分の良いところをほめられたり認められたりしないと，自分に自信がもてない。	-.04	.16	-.04	**.68**	.53	1.87	0.70
他の人が私の発言や行動に注目してくれないと，自分が無視されているように感じることがある。	.01	.12	.10	**.49**	.40	2.08	0.69
相手が私を避けているように思えると，私は非常に落ち込んでしまう。	.23	.09	-.01	**.47**	.45	2.24	0.76
Cumulative variance	.16	.28	.40	.52			
Correlation matrix: Factor 1	1.00						
Correlation matrix: Factor 2	.55	1.00					
Correlation matrix: Factor 3	.54	.43	1.00				
Correlation matrix: Factor 4	.54	.47	.65	1.00			

目，およびもっとも負荷量の高い因子以外の因子に対しても.30 以上の負荷量を示した項目を除外しながら同様の分析をくり返したところ，各因子において上地・宮下（2009）の報告とほぼ同じ項目群から構成される 4 因子が抽出された（KMO = .88; $\chi^2_{(105)} = 1214.70$, $p < .001$）。探索的因子分析の結果，各因子の α 係数の値，および各項目の平均得点と標準偏差を Table 1 に示す。

この 4 因子構造の妥当性を検証すべく，探索的因子分析の結果を仮定した確証的因子分析を行った。その結果，一部の適合度指標において充分な値が確認されなかったものの（$\chi^2_{(84)} = 140.95$, $p < .001$，*AGFI* = .89），他の複数の適合度指標においては充分な値が確認された（*GFI* = .92，*RMSEA* = .06，*SRMR* = .05，*CFI* = .95，そして *PNFI* = .71）。

共分散構造分析において採用すべき適合度指標に関する議論を検討した Hooper, Coughlan, & Mullen（2008）は，χ^2，*RMSEA*，*SRMR*，*CFI*，そして *PNFI* の値を報告することが妥当だろうと結論づけている。本研究結果は，χ^2 値を除く 4 つの指標において Hooper et al.（2008）の示す基準を満たしていた。このことに加えて，χ^2 値についてはその仮説検定結果の有効性そのものに対して疑問があるという見解（豊田，1998）も考慮すると，本研究の確証的因子分析結果はある程度の妥当性を有していると判断できる。すなわち，高齢者においても，大学生と同様に，自己顕示抑制，自己緩和不全，潜在的特権意識，そして承認・賞賛過敏性の 4 因子から構成される自己愛的脆弱性が確認された。

なお，α 係数の値が 3 つの因子において.80 を下回っており，充分な信頼性を確認することはできなかった。しかしながら，いずれの因子においても.70 台後半の値が得られたことから，許容範囲内の信頼性が確認されたとみなした（cf. Bland & Altman, 1997）。

高齢者と大学生の自己愛的脆弱性の比較

自己愛的脆弱性の下位尺度の平均得点を高齢者と大学生の間で比較した（Table 2）。この際に，大学生のデータについては，高齢者と同じ項目を用いて各下位尺度得点を算出して分析に用いた（大学生のデータにおける各

Table 2 Descriptive statistics and the results of Welch's *t* tests between older adults and undergraduate students on the scores of the subscales of NVS

		Older adults		Undergraduate students		Results of Welch's *t* tests			
		M	*SD*	*M*	*SD*	*df*	*t* value	Cohen's *d*	95% CI
Inhibition of self-exhibition	Males	2.47	0.61	3.11	0.84	106.77	5.11 ***	.89	0.40-0.90
	Females	2.71	0.62	3.35	0.78	168.25	6.57 ***	.93	0.45-0.83
Insufficiency of self-soothing	Males	2.25	0.70	2.70	0.85	116.79	3.40 ***	.59	0.19-0.72
	Females	2.50	0.73	3.15	0.85	178.11	6.05 ***	.83	0.44-0.87
Covert sense of entitlement	Males	2.38	0.62	2.61	0.81	110.65	1.84 †	.32	0.02-0.47
	Females	2.38	0.71	2.63	0.76	189.50	2.48 *	.34	0.05-0.45
Hypersensitivity to approval/ admiration	Males	2.10	0.63	2.85	0.93	102.28	5.47 ***	.97	0.48-1.02
	Females	2.05	0.55	2.96	0.77	155.68	9.74 ***	1.40	0.72-1.09

Note. ***$p < .001$, *$p < .05$, †$p < .10$.

因子の信頼性は，第一因子から順に αs = .81，.68，.78，そして .76 だった)。ウェルチの t 検定の結果，自己顕示抑制，自己緩和不全，そして承認・賞賛過敏性の 3 下位尺度において，男女ともに高齢者の平均得点のほうが大学生の平均得点よりも有意に低かった。潜在的特権意識においても高齢者の平均得点のほうが大学生の平均得点よりも低い傾向が見出されたが，男性においては有意傾向，女性においては 5%水準で有意だった。

t 検定の結果が 2 群（高齢者と大学生）の間の充分な差異に基づくものであるか否かを確認するために，効果量を算出した。Cohen（1988）の基準に基づくと，自己顕示抑制と承認・賞賛過敏性においては男女ともに大きな効果量が確認された（自己顕示抑制：ds = .89-.93；承認・賞賛過敏性：ds = .97-1.40）。また，自己緩和不全については，男性では中程度の効果量（d= .59）が，女性では大きな効果量（d= .83）が認められた。潜在的特権意識については，男性（d= .32）においても女性（d= .34）においても充分な効果量は確認されなかった。

以上，ウェルチの t 検定結果と効果量の値から，自己顕示抑制，自己緩和不全，そして承認・賞賛過敏性について，高齢者の平均得点は大学生の平均得点よりも低いと結論づけられた。

考　　察

本研究の目的は，自己愛的脆弱性について高齢者と大学生を比較し，成人期以降の自己愛的脆弱性の様相，および成人期以降に自己愛的脆弱性を低下させる原因を検討することだった。はじめに，因子分析の結果から，高齢者においても大学生と同様の因子構造が確認され，自己愛的脆弱性尺度短縮版（上地・宮下，2009）を用いて高齢者と大学生の間で自己愛的脆弱性の比較が可能であることが示された。そこで，高齢者と大学生の間で自己愛的脆弱性尺度の平均得点を比較したところ，4 下位尺度の中で自己顕示抑制，自己緩和不全，そして承認・賞賛過敏性において両群間の差異が認められた。以下では，自己愛の障害の治療プロセスを手がかりにして，成人期以降に自己愛的脆弱性を低下させる原因について考察したい。

自己顕示抑制，自己緩和不全，そして承認・賞賛敏感性について，高齢者のほうが大学生よりも低い平均得点を示したということは，多かれ少なかれ，成人期以降の一般的な生活の中に自己愛の歪みを是正するような経験があることを示唆している。Lieberman（2004 神谷・市田 監訳 2007）によれば，自己愛の障害の治療では，患者が自分自身のこれまでの生活について洞察し，自分自身の自己愛的防衛（e.g., 誇大な自己像）と本来の自己との相違（自我違和感）を認識した際に，治療者がその精神構造の根本にある，見捨てられ抑うつを適切に扱うことによって患者の自己表象と他者表象との分離を進めていく。その結果，患者は徐々に自己愛的防衛から脱却し，他者からの評価を意識することなく，自己を支えられるようになる。

この考え方にしたがうと，加齢にともなう自己顕示抑制，自己緩和不全，そして承認・賞賛過敏性の低下は次のように解釈される。すなわち，加齢にともなう社会的役割の変化（e.g., 子どもの成長にともなう親役割の変化）や身体的衰え（e.g., 容貌の変化）の認識は，それ以前までに抱いていた自己愛的防衛に対して自我違和感を人々に引き起こす。この際に，重要な他者との親密な関係の中で見捨てられ抑うつを慰められつつ，社会的・身体的変化を受け入れた自己の再構築が達成されることにより（e.g., 子どもを自分自身の自己の延長物とした理想化投影を断念し，子どもと精神的に分離した自己を構築する），自己表象と他者表象の分離が進む。その結果，自分に対する他者からの評価を意識せずに（承認・賞賛過敏性の低下），自己を支えられるようになり（自己緩和不全の

低下)，ひいては過度の恥意識に基づく自己顕示抑制が軽減される（自己顕示抑制の低下)。言い換えると，社会的・身体的変化の認識によって引き起こされる自我違和感の一つひとつに対して，重要な他者との親密な関係に支えられて適切に処理していくことが，自己愛的防衛からの脱却を可能にし，ひいては自己愛的脆弱性という歪みを是正していくと推測される。

この解釈は，パーソナリティが個人と社会的環境との相互作用によって変化するという考え方とも一致する。Roberts, Wood, & Caspi（2008）は，パーソナリティの可変性を支持する根拠として，社会的役割が特定の行動に対して個人に報酬や罰を提供すること，他者の行動をモデリングすること，そして自己イメージと矛盾するフィードバックを他者から受けることが個人に変化をもたらすことを挙げている。その中でも，結婚，仕事，そしてコミュニティといった社会的慣習領域における変化が，特に個人のパーソナリティの変動に影響すると考えられている（Roberts et al., 2008)。結婚や就職を始点とする家庭内外における社会的役割の変化は，主に成人期以降に経験されるものであり，それらの変化に起因する自我違和感への対応が自己愛的脆弱性を変化させるという解釈は妥当であると思われる。

その一方で，潜在的特権意識においては加齢にともなう低下が認められなかった。この結果については，潜在的特権意識が日本的人間関係を色濃く反映する下位尺度であることに起因していると考えられる。小此木（1981/1992）によれば，日本的人間関係には自己愛的同一視が根本にあり，それはお互いの自己愛を支え合うという人間関係に表れている。すなわち，日本的人間関係では建前の背後にある本音を読み取ることが暗黙裡に期待され，わたし達はこのような期待が満たされることをとおして自分の存在意義を実感することができる（稲垣, 2005)。潜在的特権意識の下位尺度項目の内容を見ると，周囲の者が自分の本音を汲み取って応答してくれないことに対して思い悩む心のあり様を表しているとも解釈できる。このような人間関係における文化的背景が根底にあるために，潜在的特権意識では加齢による低下が認められなかったのではないかと推測される。

最後に，本研究の限界と今後の課題について考察する。本研究は，高齢者の自己愛的脆弱性が大学生のそれよりも全般的に低いことを実証したこと，およびその考えられる原因として，成人期以降の社会的・身体的変化によって生じる自我違和感を適切に処理していく中で進行する自己表象と他者表象の分離を提案した点で意義深い。しかしながら，本研究は多様な社会的役割経験の有無といった変数を扱っておらず，自己愛的脆弱性における成人期以降の発達的変化をもたらす原因については推測の域を出ない。特に，成人期以降の人々に起きる社会的変化や身体的変化は多々あるが，本当にそれらが自己愛的脆弱性を低下に向わせる契機となるのか，といった問題に対して実証的に答えることが課題として残されている。契機となる出来事に一般的な傾向はあるのだろうか。それとも，出来事は人によってさまざまであるが，自我違和感の気づきからその適切な処理の完遂に至るまでのプロセスに一般的な傾向があるのだろうか。これらの問いに答えていくことは，自己愛的脆弱性を生涯発達の枠組みから理論化していく上でも不可欠である。

また，本研究は横断的調査方法を採用したことから，本研究結果が世代間の差異を反映している可能性を否定することはできない。実際に，米国における昨今の青年期世代においては，これまでの青年期世代にないほどNPI の平均得点が高まっているという報告もある（Twenge & Campbell, 2009)。この見解については否定的な意見もあるものの（e.g., Arnett, 2013)，今後の研究では，成人期以降の自己愛的脆弱性と社会的，身体的変化の関連性の検討と同時に，コホート系列研究をはじめとする調査方法の工夫が求められる。

引用文献

Arnett, J. J. (2013). The Evidence for generation we and against generation me. *Emerging Adulthood*, **1**, 5-10.

Bland, J. M., & Altman, D. G. (1997). Statistics Notes: Cronbach's Alpha. *British Medical Journal*, **314**, 572.

Cohen, J. (1988). *Statistical power analysis for the behavioral sciences*, 2nd ed. NJ: Lawrence Erlbaum.

Foster, J. D., Campbell, W. K., & Twenge, J. M. (2003). Individual differences in narcissism: Inflated self-views across the lifespan and around the world. *Journal of Research in Personality*, **37**, 469-486.

Gabbard, G. O. (1997). Transference and countertransference in the treatment of narcissistic patients. In E. F. Ronningstam (Ed.), *Disorders of narcissism: Diagnostic, clinical, and empirical implications*. DC: American Psychiatric Press, pp. 125-145.

(ギャバード, G. O. 佐野信也 (監訳) (2003). 自己愛患者の治療における転移と逆転移. E. F. ロニングスタム（編）自己愛の障害――診断的，臨床的，経験的意義―― 金剛出版 pp. 121-137)

原田 新 (2009). 自己愛の過敏性に関する一考察 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, **3**, 19-28.

原田 新 (2012). 発達的移行期における自己愛と自我同一性との関連の変化 発達心理学研究, **23**, 95-104.

Hooper, D., Coughlan, J., & Mullen, R. Michael. (2008). Structural equation modeling: Guidelines for determining model fit. *The Electronic Journal of Business Research Methods*, **6**, 53-60.

Horton, R. S. (2011). Examining "developmental me": A review of narcissism as a life span construct. In W. K. Campbell & J. D. Miller (Eds.), *The handbook of narcissism and narcissistic personality disorder: Theoretical approaches, empirical findings, and treatments*. NJ: John Wiley & Sons, pp. 191-201.

稲垣実果 (2005). 自己愛的甘えに関する理論的考察 神戸大学発達科学部研究紀要, **13**, 1-10.

上地雄一郎・宮下一博 (2006). コフートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成 パーソナリティ研究, **14**, 80-91.

上地雄一郎・宮下一博 (2009). 対人恐怖傾向の要因としての自己愛的脆弱性, 自己不一致, 自尊感情の関連性 パーソナリティ研究, **17**, 280-291.

川崎直樹 (2011). 自己愛の心理学的研究の歴史 小塩真司・川崎直樹（編）自己愛の心理学――概念・測定・パーソナリティ・対人関係―― 金子書房 (pp. 2-21)

川崎直樹・小玉正博 (2007). 対人恐怖傾向と自己愛傾向の共通構造としての自己概念の乖離性及び不安定性の検討 パーソナリティ研究, **15**, 149-160.

Lieberman, A. R. (2004). The narcissistic personality disorder. In J. F. Masterson & A. R. Lieberman (Eds.), *A therapist's guide to the personality disorders: The Masterson approach*. AZ: Zeig, Tucker & Theisen, pp. 73-89.

(リーバーマン, A. R. 神谷栄治・市田勝 (監訳) (2007). 自己愛性パーソナリティ障害. J. F. マスターソン & A. R. リーバーマン (編) パーソナリティ障害治療ガイド――「自己」の成長を支えるアプローチ―― 金剛出版 pp. 89-111.)

Masterson, J. F. (1981). *The narcissistic and borderline disorders: An integrated developmental approach*. NY: Brunner/ Mazel Publisher.
(マスターソン, J. F. 富山幸佑・尾崎新 (訳) (1990). 境界例と自己愛――発達理論に基づく統合的アプローチ――　星和書店)

中山留美子 (2007). 児童期後期・青年期における自己価値・自己評価を維持する機能の形成過程　パーソナリティ研究, **15**, 195-204.

小此木啓吾 (1981/ 1992). 自己愛人間――現代ナルシシズム論――　ちくま学芸文庫

小塩真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情，友人関係のあり方との関連　教育心理学研究, **46**, 280-290.

小塩真司 (2001). 自己愛傾向が自己像の不安定性，自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響　性格心理学研究, **10**, 35-44.

小塩真司 (2004). 自己愛の青年心理学　ナカニシヤ出版

Pincus, A. L., Cain, N. M., & Wright, A. G. (2014). Narcissistic grandiosity and narcissistic vulnerability in psychotherapy. *Personality Disorders: Theory, Research, and Treatment*, **5**, 439-443.

Raskin, R., & Terry, H. (1988). A principle-components analysis of the narcissistic personality inventory and further evidence of its construct validity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 890-902.

Roberts, B. W., Wood, D., & Caspi, A. (2008). The development of personality traits in adulthood. In O. P. John, R. W. Robins, & L. A. Pervin (Eds.), *Handbook of personality: Theory and Research.* 3rd ed. NY: Guilford Press, pp. 375-398.

Robins, R. W., & Trzesniewski, K. H. (2005). Self-esteem development across the life span. *Current Directions in Psychological Science*, **14**, 158-162.

清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2008). 対人恐怖心性―自己愛傾向 2 次元モデルにおける性格特性と精神的健康の関連　パーソナリティ研究, **16**, 350-362.

谷　冬彦 (2006). 自己愛人格尺度 (NPS) 短縮版の作成　日本教育心理学会第 48 回総会発表論文集, 409.

豊田秀樹 (1998). 共分散構造分析 (入門編) ――構造方程式モデリング――　朝倉出版

Twenge, J. M., & Campbell, W. K. (2009). *The narcissism epidemic: Living in the age of entitlement*. NY: Free Press.

Wink, P. (1991). Two faces of narcissism. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 590-597.